

「能因も 草鞋だこには 気がつかず」という江戸時代の川柳（狂歌）を見つけた。その時は、どのような意味か、何がおかしいのか皆目見当が付かなかった。註1

能因とは能因法師のことで、貴族や武士、僧侶の間で和歌が流行った平安時代の中期の有名な歌人である。百人一首の「あらしふく 三室の山の もみぢばは 龍田の川の 錦なりけり」が彼の作である。この歌と「都をば、霞とともに 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白河の関」（後拾遺集）がよく知られた代表作であろうか。



白河の関跡



彼は風狂の人でもあったという。特に、この「都をば・・・」の歌を作った逸話は有名である。彼は春に奥州に旅に行くといつて、姿を消し、鞍馬かどこかの人里離れた山奥に隠遁し、太陽で肌を焼き、晩秋に姿をあらわした。そしてこの歌を人々に見せたのだ。日焼けした肌であたかも長い旅から帰ってきたように装って。恐らく、彼は京都でこの歌を思いつき、たいそう気に入ったのだろう。そのために一芝居打つたのである。しかし、何ヶ月に及ぶ長い旅をすれば、日焼けに加えて、草鞋だこができることまでは気がつかなかった。文頭の川柳の作者は、それをからかっている。

ここで驚くことは、町人であろうこの作者や、川柳を楽しんだ人たちは、平安時代の和歌を知り、逸話まで周知のことであったという事実である。書物や情報に溢れた現代とは環境がまったく異なっていたはずである。寺子屋で教えることでもない。どのように庶民が学び、伝えてきたのだろうか。

争いがなく、社会が安定していて、人々に生活の不安がない、心にゆとりがある時代には、文化が花開く。和歌が流行った平安時代の中期しかり、中国、中近東、ヨーロッパの歴史を見ても明らかであり、世界共通といえる。しかし、それらの文化は上流社会の限られたひとたちの文化であった。

江戸時代、特に穏やかな世情であった元禄期の前後は、俳句、戯作（小説）、川柳や絵画、版画、そして歌舞伎や芝居などの文学・芸術が素晴らしい発展と広がりを示している。この時代の文化の特徴は、上流社会に限らず、町人、農民など一般庶民までもが、大都市だけでなく全国津々浦々で、俳句や川柳を作り、戯作を読み、芝居を楽しんでいたとのことである。そういえば、当時の日本の識字率は世界でトップであり、一般庶民クラスが文学や演劇を楽しんでいたのは他国には例がないと、どこかの本に書いてあった。

勿論、この時代には、和算術、天文学などの学問、農業・製造技術、土木治水技術なども発展している。ただ、武器の技術は戦国末期からほとんど進んでいない。鉄砲は種子島に渡来したあと数年で大量生産され、戦国時代を終わらせるのに貢献したのに、その後、250年間これといった改良や発明はなかった。改良・改善が得意な日本人にしては、不思議な気がする。領土拡張の争いが絶え間なくおこり、そのための武器の改良、発明にしのぎを削っていた当時のヨーロッパを考えると、平和を維持した江戸幕府の統治能力は高く評価されるべきなのだろう。

長く平和が続いたからこそ、一般庶民も文字を覚え、本を読み、知識を深めることが可能となり、その結果、秩序を尊ぶ精神とともに、美しいものを愛でる心が根付き、面白いものを求める好奇心が養われたのだろう。有名な世界の歴史的文化と比べれば、スケールはあまりに小さいが、それでも自慢していい立派な文化といえると思う。

司馬遼太郎の「坂に上の雲」ではないが、長い鎖国の後、欧米の知識・技術をむさぼるように吸収し、列強の大国から、決して好かれはしなかったが、短い期間で一目置かれるようになった背景には、平穏な江戸時代に培ったこれらの文化があるのではないだろうか。そう考えると、江戸時代は戦国時代や明治維新と比べて、歴史的な出来事が少なく、小説の題材には事欠くが、意外と面白い時代であったのではないか、そして同時に、日本人というのは素晴らしい国民だと思えてきてうれしくなる。文頭のたわいない川柳を読んで、そんなことを考えた。

おまけ： 理解するためには知識が必要な江戸の川柳 その2

「とはしらず、あかずの門へ 九十九夜」

源氏物語と室町時代の能作者、世阿弥が深草少将と小野小町の恋物語を描いた「百夜通い（ももよがよい）」がもとになっている。意味はここでは書けません。

註1 川柳は俳句から派生したものではない。江戸中期に短歌の遊びとして「前句付け」が始まり、その後、狂歌とよばれた。川柳と名づけられたのは、明治期に入ってからのことである。